

第2回海外意匠商標調査使節団の派遣

通産省では最近東南アジア各国で、わが国のデザインを盗用するケースが目立って多くなったことから、昨年その実態調査と相手国の政府関係機関、業界団体などと模倣防止に関する意見交換を行なうため調査使節団を香港、中華民国、タイの3ヵ国に派遣したが、今年度も引き続いて第2回目の調査使節団を派遣した。日本陶磁器意匠センターの水野智彦専務理事を団長とする一行6名で、香港、中華民国、タイ、および新たにシンガポール、マレーシアを加えた5ヵ国を12月12日より3週間にわたって訪問した。香港、中華民国、タイについては、前回調査で知得した各国の工業所有権関係法制とその運用の実態をもとに、いまだに円満解決をみていない事件を具体例として、関係機関、団体などと妥当な模倣防止策の確立についての意見交換が行なわれ、マレーシアおよびシンガポールについては新たに意匠商標などに関する関係法令の解釈、運用上の問題点の調査、政府関係機関、業界団体などとの模倣防止に関する意見交換が行なわれた。

西ドイツ工業規格 (DIN) の製図法とレタリングの規格改訂

マイクロ・フィルムによる設計図面の管理、保管が近年世界的に普及してきていることから、西ドイツ規格協会はこのほど世界に先がけて工業規格 (DIN) の製図法とレタリングの規格の一部を新たにマイクロ・フィルムに適するように改訂し、1月1日付をもって発表した。これは従来の製図法にもとづく図面では、マイクロ・フィルムに撮した場合に近接した線や、入りくんだ文字が重なってしまい、再成した図面の判読が不可能なケースが出てくるためである。このため使用する製図線、文字、数字などについてフィルムの解像限度を考慮し、再成した場合に原図と同サイズと同様に明瞭であることを前提として、線幅、線相互の太さの比率、文字の大きさと太さの比率などが改訂さ

れた。新たに定められた数値は用紙のモジュールである $\sqrt{2}$ を基底とした比率にもとづいており、コマ以下2桁ミリまでの細かい数値となっている。この結果新規格下では判読が容易になるとともに次の利点が付加された。①縮尺サイズが増加したこと ($1/25 \rightarrow 1/30, 1/40$)、②原図修正の製図線、文字の選択が容易になったこと。

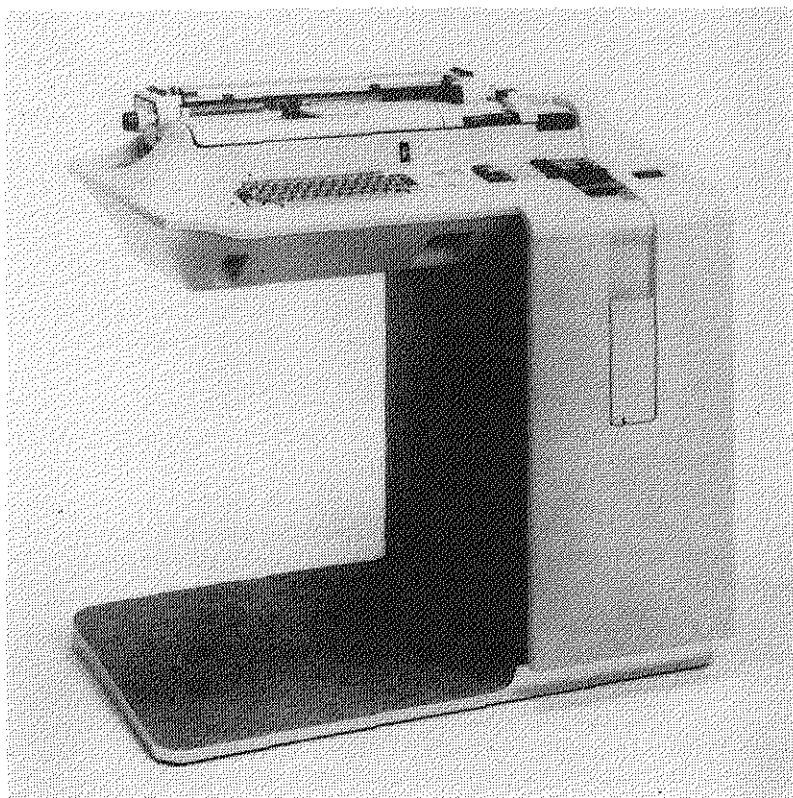
なおこの改訂により、製図関係、ことに製図用具などへの影響はかなり大きいと思われる。またわが国でも JIS がこの西ドイツの工業規格 DIN を見習って定められたこともあり、マイクロ・フィルムングの普及、また国際間の技術交流が盛んになるにつれて、この改訂が将来わが国の製図界にも少なからず影響を及ぼすことが考えられる。

オリベッティの新製品《プログラマ203》

さきに画期的な机上用小型コンピューター《プログラマ101》を発売し好評を博しているイタリア・オリベッティ社はこのほど再びユニークなオフィス・コンピューター《プログラマ203》をこの1月から発売した。このプログラマ203は先の101型と最新型電動タイプライター

《テクネ3》を一つにまとめ、それぞれの長所を有効に結びつけたコンピューターである。プログラマ101 (本誌 Vol. 35 No. 1 参照) は、端末事務から情報管理までという一般の事務処理の多様性に対処すべく設計され、小型ながらも高性能と、大型計算機では得られない機動力を持つコンピューターであるが、この203はさらにこれに《テクネ3》を連動し一体化することによって直接書類を複製できるようにしたものである。写真で見るとおりデザイン面でもかなりユニークで新鮮な構成と処理がなされている。デザイナーは101と同じく、マリオ・ベリーニとマルコ・ザヌーブでこの種のものには珍しい大胆なカンチレバー構造をとることによって、オペレーターの足元を解放するとともに、全体をコンパクトで明快なものにしている。操作面のあるトップ・カバー部分はプラスチックの一体成形で、カンチレバー部分にテクネ3、その右側に101部分が配置されている。101でのデザインにおける、操作上への配慮という姿勢がそのまま受け継がれ、有機的に統一された新鮮なフォルムとなっているようである。幅92×奥行57×高さ92センチ、重さ130キロ。

オリベッティ・プログラマ 203



第1回 JIDA 研究発表会の開催 日本インダストリアル・デザイナー協会(JIDA)は、その年間活動の一環として、研究委員会主催による公開研究会、講演会を毎月開催してきているが、42年度ではさらに新たな試みとして、第1回 JIDA 研究発表会を企画し、2月14、15日の2日間、港区六本木の国際文化会館講堂において一般公開のもとに開催した。この研究発表会は JIDA 会員の自主的な研究発表の場として企画されたもので、会員相互の研鑽はもとより、広く一般公開することによって、ID 界内外の人々による ID に対する総合的な探求の場とすることが期された。研究発表は、①新しい研究の発表、あるいは新しい問題提起、②既に発表されたデザインがいかなる条件下、思考のもとに生み出され、いかなる影響を社会に与えたか、などのデザイン形成過程における問題の具体的公表、という二通りのケースで行なわれた。今回の6テーマの中には、各専門誌、学会などですでに発表された内容のものもかなりあったが、このように ID の研究としてまとめて発表されることの意義はきわめて大きいと思われる。これからも続けてもらいたい好企画であろう。ただ時間の都合もあってか、質疑応答、意見交換の場がなかったことは残念なことにように思われる。

発表者とテーマは次のとおり。

2月14日(水):“第三期 ID 論—発想と展開—” 柴久庵祥二(GK) / “ID の統一形態におけるトポロジー解析” 高梨隆雄(ソニー) / “民家のシステム調査とその展開—人・道具・住居の相関性について—” 山本敏郎(東京芸術大学)

2月15日(木):“自動車デザインのプロセスとその特性” 手銭正道(日産自動車) / “プラスチック製品の外形、形状に影響を及ぼす要因とその対策” 中村次雄(積水化学工業) / “生活空間の工業化へのプレゼンテーション” 東方洋雄(ナショナル住宅建材)

第3回日本自転車デザイン・コンクール結果発表

関西自転車産業協会主催によるこのコンクール募集は1月31日に締切られたが、3月6日その結果が発表された。応募総数133点で前回より27点増加、課題別では一般家庭用が全体の70%を占め、レジャー用、万博会場用などがこれに続いた。一般的傾向として

は、ほとんどが16インチ車輪を対象とし、ホーム用としては機能、材料面にアイデアの新しいものがみられ、買物、乳母車兼用車、婦人専用車、買物車がほとんどであった。その他の課題では20%が集まり、万国博用、工場用運搬車、4輪車あるいは水上用、水陸兼用など新しい品種の開発を意図するものがあったが、まだ既成概念にとらわれがちで、新しいメカ、材料とスタイルの調和に欠ける点が多く、もう一步の努力がほしいというのが審査員の声のようだった。入賞、入選作品は次のとおりである。

特選:万国博会場用車(安井敏)、入選1席:ホーム車(大倉源児,津村満治)、入選2席(2点):ホーム車(山本正人,鈴木武夫,中川文桜);ホーム車(網戸通夫),入選3席(3点):ホーム車(東田義昭):ホーム車(畑川正之);ホーム車(金子勤)。ほかに佳作10点、奨励賞10点。なお、本作品発表会は大阪市、名古屋市、東京都内において巡回展示される。

日本人間工学会中国支部結成さる

日本人間工学会は創立以来順調に活動を展開しており、現在会員1,100名余であり、逐次全国的に組織を強化するため各地方別支部開設を促進しているが、去る3月16日、中国支部の設立をみた。初代支部長には正戸茂氏(広島大学教授)が選出され事務局は広島市内におかれた。会員数は68名。広島市における発会式には本部より大島正光副会長らが参列、特別講演として中尾喜保氏(東芸大)による「生体計測と人間工学」があり、極めて盛会であった。ちなみに同支部は関西、関東、東北に次いで4番目である。このほか、本部としては東海地区、九州地区などの早急の支部結成をも期待している。

グッドデザイン展 '68 <デザイン・フォア・リビング> 作品公募

日本デザイン・コミッティでは例年秋にグッドデザイン展を東京銀座の松屋において開催しているが、今年度は隔年に行なわれる一般公募展の年にあたり、一昨年のグッドデザイン展 '66 <デザイン・オン・ザ・テーブル>と同様に、来る9月次のような内容で行なわれることになった。グッドデザイン展 '68 <デザイン・フォア・リビング>—遊ぶ・つどう・寝る・食べる・読み書く

作品の募集要領は次のとおり

●出品申込:出品希望者は6月末日までに葉書に出品点数、住所氏名を明記して出すこと。事務局より出品申込書が送られる。

●作品搬入:出品作品は7月22日~24日(予定)に受け付ける。(時間10時~17時)搬入に際しては所定の出品申込書を添付して申込むこと。地方よりの出品は7月22日(予定)までに到着するよう下記搬入場所宛に送付のこと。

●搬入場所:東京都中央区明石町2~20株式会社松屋明石町別館グッドデザイン展係。

●作品搬出:搬出日は作品受付の際通知する。搬出の際は受領書と引き換えに引き取ること。地方よりの出品は荷造費運賃共出品者負担。

●出品料:出品作品一点につき1,000円

●入選通知:入選可否は審査の後に文書で通知する。

●作品取扱:陳列作品は会期中搬出することはできない。出品作品に対しては天災その他不慮の事故以外主催者側が十分鄭重に取扱う。

●賞:作品の中で特に優秀なものに対してはグッドデザイン賞(副賞20万円)が与えられる。

審査員:浜口隆一、原弘、石元泰博、伊藤憲治、亀倉雄策、勝見勝、剣持勇、河野鷹思、岡本太郎、清家清、滝口修造、渡辺力、柳宗理、吉阪隆正、松村勝男、森正洋。

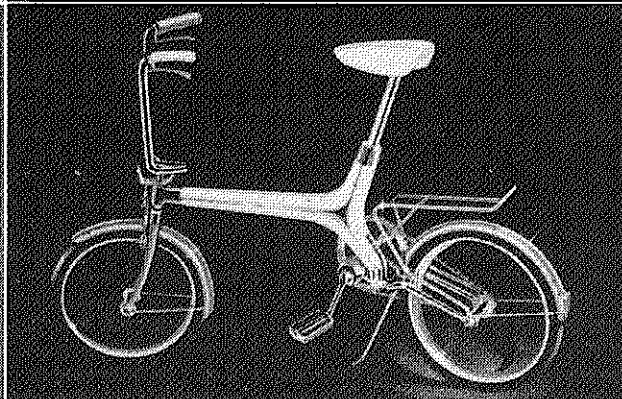
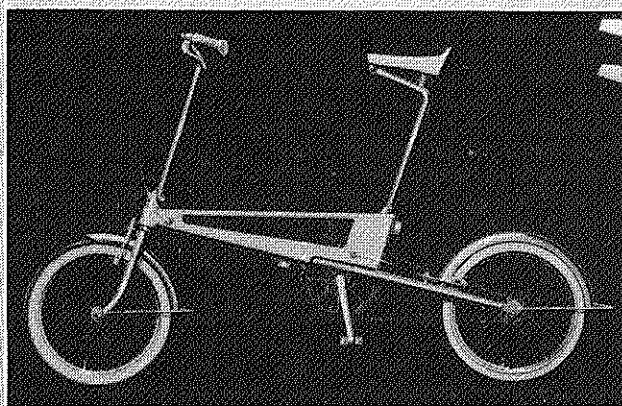
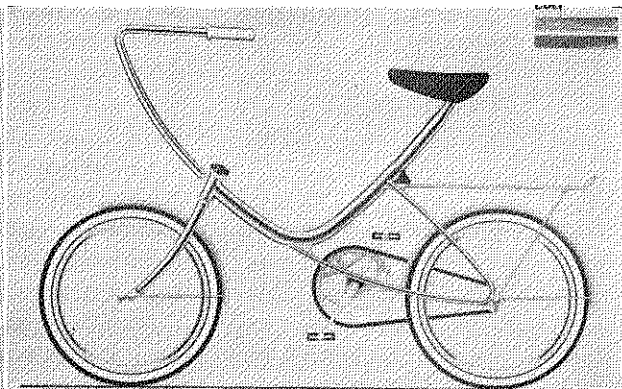
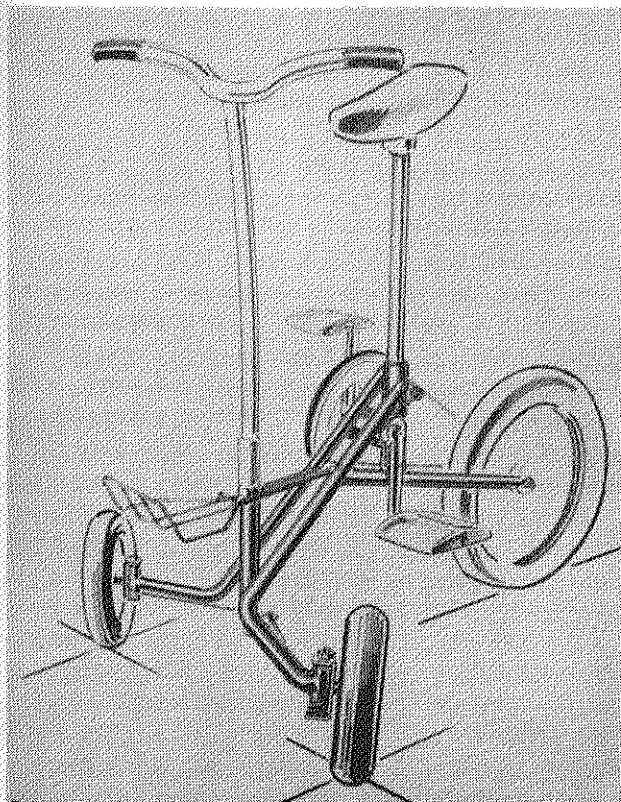
●連絡先:東京都中野区東中野5-10-15 日本デザイン・コミッティ事務局 Tel 363-5661~3。銀座松屋グッドデザインコーナー Tel. 567-1211 内(2726)

照明器具のデザイン展

ジャパン・デザインハウス(日本貿易振興会)では、去る2月19日(月)から3月9日(土)まで

“照明器具のデザイン展”を開催した。この展示会は昨年の“自動車のデザイン展”や“衛生設備のデザイン展”などと同じく特別企画された展示会で、照明器具デザインの歴史、現況、デザイン上の問題点などをパネルで説明したのを始め、内外の照明器具の秀作、日本の古い照明具などが一堂に集められた。また、“日本の照明”と題する映画の上映も行なわれた。会場内は多くの照明器具ががもし出すさまざまな表情の光であふれ、目を楽しませる楽しい展示会であった。折しもIAIでフィンランドの照明器具デザイ

上から特選：万国博会場用車（安井敏）、2席：ホーム車（網戸通夫）、3席：ホーム車（畑川正之）



上から 1席：ホーム車（大倉源見，津村満治）、2席：ホーム車（山本正人，鈴木武夫，中川文俊）、3席：ホーム車（金子勲）、3席：ホーム車（東田義昭）

ナー、リーザ・ヨハンソン・パーベ女史を招へいしてセミナーを行なっており、また山際国際照明器具コンペが行なわれ、デンマークよりシモン・ヘーニングセン、スウェーデンよりハンス・アルネ・ヤコブソンを審査員に迎えるなど、このところ照明器具デザインについての催しがつづいた。

ミュンヘン手工芸国際見本市国際特別展 西独ミュンヘンの国際手工芸見本市 International Handwerks Messe München はいくつかの特別展の内容において以前から識者の間で高く評価されていた見本市であるが、今年は国際特別展として：

1. Form and Quality
2. Modern Interiors
3. Design in Handicrafts and Industry

を設け、1968年3月15日より24日まで、見本市会場の中央に位置する7号館において開催された。この国際特別展のうち 'Design in Handicrafts and Industry' の展示にあたって見本市事務局はドイツの ICSID 加盟団体である Rat für Formgebung と共同し、ICSID 加盟の各国の参加協力を要請し、オーストリア、チェコスロバキア、デンマーク、フランス、イギリス、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、スイスおよび西独などの各国の団体が10~15点の出品物をもって参加することになった。日本にも見本市事務局より JETRO および ICSID 加盟団体である IAI 宛に、そし

て Rat für Formgebung からも参加要請があったので、日本側では IAI および JETRO デザイン課が中心となって出品カメラ選定のための委員会を構成し、選定を行なったのち、選定のカメラのメーカーに対する展示参加を呼びかけた。選定するにあたっての基本方針は、①デザインの見地から選定を行なう②日本製カメラのデザイン・技術の高水準を示すもの、すなわち価格に関係なく品質的に最高のものと、価格のランクの中で最高のもの③機種については TTL、1眼レフ以降のものが国際的評価を得たが、8ミリシネ等、品種的制約はとくに問わないとし、次の機種が最終的に出品された。なお選定機種中メーカーの都合で出品できないものもあった。また選定に当っては日本写真機検査協会、出品については JETRO ハンブルグが協力している。

(価格に関係なく高品質のもの)：アサヒペンタックス・スポットマチック・モータードライブ、キャノンベリックス QL、ミノルタ SRT 101、ニッコール F、ニコマート FTN。(普及型の中で高品質のもの)：キャノネット QL19、トプコンユニ。(ハーフサイズ、8ミリ関係)：オリンパスペン FT、キャノンデミ E E 28、キャノンダイヤル 35、フジカシングル 8 P-300、フジカスコープ M-2、エルモズーム C-300、キャノンオートズーム 1218、キャノビジョン 8。選定委員会：榎田均(通産省検査デザイン課)、知久篤(IAI)、佐々木達三(JIDA 理事長)、小池岩太郎(JIDA 理事)、秋岡芳夫(JIDA 理事)、田中芳郎(東京芸大)。

事務局：産業工芸試験所、JETRO デザイン課、機械デザインセンター。

'68 サイクル・ショー 昨年全国的規模で開かれた初の国産自転車ショー(自転車産業振興協会、日本サイクリング協会共催)は極めて盛会であったが、これを継続的に催す意図をもってその第2回目を '68 サイクル・ショーと銘うち、4月15日~30日の間、東京都千代田区北の丸公園内、科学技術館で行なわれる。

昨年は国産自転車の優秀性、業界の近代性を広くユーザーに啓蒙することに主眼が置かれたが、今回は一步を進めて、広く海外のバイヤーに呼びかけ、すぐれた日本の自転車の実態を把握してもらい、世界市場により強力に販路を伸ばそうとする狙いから商談促進を優先する方針がとられる。いわゆる '見せまショー' から '売りまショー' への転換が特徴である。すでに欧米を中心に相当数のバイヤーの来日が予定されており、15日~17日は特にビジネスデーとされ、一般公開は18日よりとなる。完成車メーカー、部品メーカー97社が参加の予定。主なる内容は次のとおり。

展示一完成車、部品、輸出特設コーナー。テーマ別催し—サイクリングのすべて、交通安全と自転車、自転車産業の紹介、第3回自転車デザインコンペ発表、乗り方教室、自転車関係映画など。

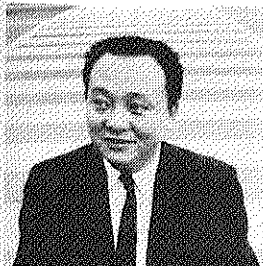
図書紹介

ヨーロッパ系(立坐系)居住型の発展に対する研究 野村茂治 著

'内より外へ' これはこの本の著者、野村茂治の建築デザインにおいて提唱していた言葉である。すべてのスタートを人間にもとめ、順次外側に環境形成の輪を広める—すなわち人間の尺度(体位、寸法、行動範囲)から、家具、調度、室内空間がきまり、さらに建築、都市へと発展すべきである。こういう観点で建築、室内空間を捉える考え方があっても良いのではないか。これが千葉大学工学部建築学科の前身である東京高等工芸学校木材工芸科の教授時代から退官されるまでの彼の主張であり、この理念のもとに数多くの子弟を育ててこられた。彼の人間中心の考え方はこの本の 'まえがき' に

照明器具のデザイン展





Our Cover Artist KATSUI Mitsuo

勝井三雄氏は1931年東京生れ。1955年東京教育大芸術学科卒業、専攻科は写真とデザインを研究。1956年味の素(株)に入社。1961年フリーランスとなる。第8回日宣美賞、ADC銅賞を受賞。1965年ベルソナ展出品、1966年エンバライメント展出品、その他映画2本製作。日宣美中央委員、モダンアート協会会員、東京教育大講師、東京造形大助教授。

(新宿区若葉町1-12 東京セントラルアパート)

も述べているように、人間存在に最も身近な居住環境において人間がどのような姿態で起居するかということがまずあって、その居住型から必然的に建築のあらゆる細部の要素までが導かれる。そして建築の機能において最も基本的と考えられる人間関係の問題の一面を原論的に究明しようとしたと述べている。

内容は4編よりなり、第I編では“各地域、各民族について特色ある居住の型の発生、かつ発展せしめられる要因”と坐臥を中心とする人体解剖学的資料による若干の簡単な実験による裏付けが述べられている。第II、III編はこの研究論文の主体をなすもので、坐と臥のそれぞれの姿態についてルーブル、カイロ、ロンドン、ベルリン、その他の博物館所蔵の絵画、彫刻などに現われた各種坐型を採用する人物の像に関する考察がなされ、案外多い平座型の慣用事実とその時期、あるいは立坐型の普遍化に対する最も有力な条件として、“エネルギーの合理的消費の経験的認識にはかならない”ことをしらしめている。そしてまた、第III編では遠い古代において人類の祖先が身をもって実験した貴重な記録である特異な半臥式坐りの型についても触れている。第IV編は結語編となっている。

わが国では明治以降の急速な欧米文化との接触により、住生活の様式も従来の平坐(タタミ)から欧米の立坐系(腰掛式)へと変化しつつあり、公共施設を始めとして住宅内も戦後の公団住宅政策でダイニングを中心に急速に立坐の生活が浸透し始めている。一方、欧米でも彼等の祖先が育てあげてきた立坐系の生活から平坐の生活にかなり眼が向けられてきている。(ペルナー・バントン、ビュール・ポーリン、ナンナ・ディッツェルなどの家具デザイン)しかし、多くの場合、“当然そこには両者を折衷する型も生じて居住の場に相当の混乱を来し、“人をして適正な判断に迷わしめ”、“二重生活

様式の採用を一般とする実情にある”として問題の焦点を坐の問題——居住型に合せている。とつつきにくい居住型の問題に長年に亘って自己のペースで研究され、少しずつ築きあげられた結果を“ヨーロッパ系(立坐系)居住型の発展に対する研究”と題してまとめられ、発表されたもので、その内容のいくつかの部分はすでに学校で講義されていたものも含まれているが、今日の東西を問わず坐の問題の重要性を考えると、こうした地味な研究にもっと世間の眼が向けられてもよいのではないだろうか。

なお、この本は著者の野村茂治教授が千葉大学を昨年3月定年退官後、間もなく病没され、ご遺族の意志で学位論文を野村茂治出版記念会が編集したものである。(M.S.)

宝文書房発行、編集・野村茂治出版記念会 渡辺力・他、B5版、110頁、頒価900円。(申込先:東京都千代田区五番町12Q デザイナーズ内、野村茂治出版記念会)

ヒューマン・ファクターズのすべて

—デザイナーのための人間工学入門—

わが国に人間工学が導入されてやがて10年になろうとしている。その間、人間工学入門に関する欧米諸国の紹介文献やわが国の研究についての記事、文献の類がある程度出版され、人間工学の何たるかについての情報は一応伝達されてはいるが、その学問分野は生理、心理、生物、統計、工学、デザインなどに広くオーバーラップしており、また記述が専門的で他分野の立場では理解し難い面がなくもない。

この著書はその副題をみてもわかるように、その道の研究者がデザインに強い理解を有し、極めて平易に人間工学を解説しているところに特色がある。

この著書は、数年前産業工芸試験所が人間工学をデザインに適用するための足

がかりとして、アメリカ著名の人間工学研究機関であるダンラップ研究所から、社副長 J・W・ダンラップ博士、同副社長 J・T・フシグナ両氏を招へいし、同試験所においてセミナーを開催した記録を編集し一冊にまとめたものである。

欧州を中心として展開されたアーゴノミックスの人間工学と、米国の強大な産業を背景として発展したヒューマン・ファクターズで代表される人間工学とは、その教育的背景、産業への適用について若干の違いがみられるが、従来の出版の多くはアーゴノミックス的観点からの記述が主で、ヒューマン・ファクターズに見る、どちらかという実利的、経済的見地を織込んだものは少ない。特に著者の一人フシグナ氏は人間工学的立場から多くの施設、機器をデザインする部門の担当者であり、デザイナーの立場からどのように人間工学者の協力を得べきか、その事例についての記述は興味ある点である。

何れにしても米国の人間工学の考え方が明らかに示されている点、特に若いデザイナーにとってアメリカの人間工学を理解する上で大いに参考にならう。(c) 主なる内容は次のとおりである。

- (1) アメリカにおけるヒューマン・ファクターズの概要
- (2) ヒューマン・ファクターズとインダストリアル・デザインの関係
- (3) ヒューマン・ファクターズにおける諸条件の摘出
- (4) 人間—機械ダイナミックス
- (5) 特定の装置とデザイン
- (6) 人体計測とデザイン問題への適用
- (7) 仕事空間のレイアウトと空間計画
- (8) 人間の仕事能力の測定
- (9) 人間をとりまき、その仕事能力に影響を及ぼす物理的、社会的環境
- (10) 指示手引書と手順
- (11) ヒューマン・ファクターズの経営実務

B5版、限定版頒布価格300円、工芸財団発行(問合せは産業工芸試験所技術相談所へ)

訂正

本誌 35巻3号中、2頁右上のマークを ICSID マークとしてありますが、これは ICSID 1967年デザイン会議のマークの誤りでした。訂正いたします。